

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	伯領ティロール一四、五世紀における官職譲与（一）
Author(s)	若曾根，健治
Citation	熊本法学，25：109-141
Issue date	1976-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/2598
Right	

熊本大学法学会発行

熊本法学第二十五号（昭和五十一年三月）抜刷

伯領テイロール一四、五世紀における官職譲与（二）

若曾根 健 治

資料

伯領ティロール一四、五世紀に おける官職譲与(一)

若曾根 健 治

はじめに

- 一 官職譲与の文書概観(以上本号)
 - 二 君主と官職保有者
 - 三 官職譲与の法形態
 - 四 官職保有者の職務権限
- むすび

はじめに

中世ドイツにおける国家の中央および地方行政機構の形成と確立とは、周知のごとく帝国においてではなく領邦においては一三世紀後半から一四世紀にかけて起こった。「遠心的傾向を伴ないつつひろがってゆく帝国官職の封建化とは異なり、官職法にもとづく官吏任命(勤務契約)とともにおのずと進む領邦官庁の建設は、国家の形成と国家の維持とを導いた⁽¹⁾」のである。一三世紀に主に地方行政の領域で生まれた領邦行政機構

の基本はその誕生以後さほど多くは変わらず一五世紀にも引き継がれてゆく。これに対し、一五世紀末から一六世紀にかけてとりわけ中央行政機構は大きく改革される(例えば合議制の導入と個々専門官庁の創設⁽²⁾)。以上の関連で本稿のとりあつかう時期はほぼ一四、五世紀である。

行政分野における領邦の帝国に対する優位は、一例をあげるとすれば、国家の文書部で作製された帳簿のなかでも重要なもののひとつ証書記録簿^{Zeugnisbuch}の作製にあらわれた。すなわち、帝国の記録簿はやつとルードヴツヒ デア バイエル帝時代に生まれながら、領邦の記録簿は第一節でふれるごとくたとえ一部領邦にかぎられようとも領域権力の確立に伴ない行政の必要に応じずでに一四世紀初頭以降独自につくられていたのである。確かに領邦行政に対する帝国の働きかけがおよそみられなかったわけではない。このよい例は、帝室裁判所設置が領邦の裁判組織に与えた影響であった。「諸ラントの裁判所令と諸ラントの宮廷裁判所 *Hofgericht* の実務とは、(学者的裁判をおこなう)帝室裁判所の規範を(ラントの)さらに下級の裁判所に伝えていった」という。それにもかかわらず、一五世紀末以降におけるこの影響の評価はともかく、これに至る一四、五世紀において領邦自らがつくり出し維持した行政機構こそが中世ドイツの国家行政機構であったのは疑いない事実といえる。

かくして本稿は、領邦行政において特徴的にしかも頻繁に起こった官職譲与の現象を直接の考察対象にして中世後期領邦行政史の一素材を提示しようとするのである。債務の弁済のため

また勤務の報償として領邦君主のおこなう官職譲与の現象そのものは、領邦史において繰り返し指摘される周知の事柄である。しかしながら、その実体はさほど具体的に知られていないと思われる。すなわちこれを詳言すれば、(一) 官職譲与の文書部作製証書には一体個々のいかなる内容が盛られているか、また (二) 官職保有者は何人での官職が譲与され、これに對しいかなる官職は譲与されないか、さらに (三) 官職譲与の法形態は何か、そして (四) 保有官職(ないし官職区)内における行政はいかに展開されるか、について十分なデュータが与えられているとは未だいえないのである。本稿の直接の目的は、以上(一)から(四)につきできるだけ具体的資料を提出しようとするにある。

以上のとき官職譲与をめぐる諸問題の究明こそは、特定の歴史段階(一四、五世紀)のものと領邦統治の具体的様相を端的に示してくれる。すなわち、一方で貨幣経済が在地の末端にまで浸透し、しかし他方でそれを強固に統率する中央行政組織の未だ完備しない(例えば国家予算制度の欠如)段階にあって、いかに地方官職が領邦君主にとっては一種の「銀行支店」の機能を果たし、官職保有者にとっては収益の大きい一つの「事業」であったか、他面いかに君主は官職保有者しかも世襲保有者に対し人民の直接掌握に腐心したか、をわれわれはありありとうかがうことができるのである。ただし、これをうかがう場合でも当然領邦内制史全体の基本的構造との関連にたえず注意を払わなくてはならず、この点でとりわけ重要なのは、本稿の

とりあつかう時期に形成発展をみせる領邦等族制度との関連であらう。

本稿は領邦の一例として伯領ティロールをとりあげたが、これは全く筆者の個人的事情による。ただ、当領邦が従来わが国では、例えば国制史上「ラントタークに對する出席権をもつ農民身分」の存在で、また経済史上「一五・一六世紀の交におけるハプスブルク家の世界勢力(Weltmacht)への上昇」をもたらした銀山業の盛況で、あるいは商業史上アルプス通商路のうちで「最もよく整備された通路」であるブレンナー峠越えで、また土地法史上「ローカルな権力の存在を許さ(ない)」「自由な」Erbleiheのラント」で、そして定住史上「Einzelhof又はWeilerがなかなかDorfにまで進展しない」山岳国家で、ブランドンブルク、ザクセン、バイエルン、オーストリア等の諸邦に比較して未だ断片的にしかとりあげられない現状を顧みるとき、今少しこの伯領の歴史を(とりわけその特徴的なしかも先進的な行政機構史に照準を合わせ)紹介したいと思う。本稿が提出する伯領ティロールの官職法の一素材が他の諸邦の行政をより深く知るのに、また当時の国家生活の一端をうかがうのに少しでも役に立つならば筆者の望外の喜びである。最後にしたが、伯領ティロール一四、五世紀における官職譲与の資料として本稿が紹介するのは、次の通り。(一) ヨーゼフ・フォン・ブランドイス、『ティロールにおける領邦官僚史』(一八五〇年)、(二) リカード・ホイベルガー、『一二三

(14) 年。(15) オットー シュトルツ、『一四・一五世紀におけるティロール君主の官職譲渡に関する文書』(一九五五年)、のそれぞれ巻末に付された諸文書、および、(4) シュヴァイントリドープシュ、『オーストリア古文書選集』(一九九五年)、(5) フランツ バステイアン、『古いティロール会計報告書にあらわれた上部ドイツの商人』(一九三一年)、(6) アロイス ツァウナー、『最古のティロール文書部記録簿』(二〇〇八年・三二五年)、『(一九六七)の三刊本史料集所収の関係文書、が主なものである。』

- (1) M. Spindler (Hrsg.), Handbuch der bayerischen Geschichte, II (1969), S. 549.
- (2) v. Below, Territorium und Stadt (1923), S. 201.
- (3) Schröder-Künßberg, Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte, S. 767. vgl. K. Kroeschell, Deutsche Rechtsgeschichte II, S. 173. 一三〇〇年頃ハインリッヒのふじ国古文書部の記録簿作製が始まったこと。(16) 以下、H. Bresslau, Handbuch d. Urkundenlehre I, S. 130 ff. 参照。
- (4) ミッタイス・スリリー・ベリッヒ、ドイツ法制史概説、四九四頁。〔 〕内は筆者が補ったもの。
- (5) Vgl. F. Hartung, Deutsche Verfassungsgeschichte vom 15. Jahrh. bis zur Gegenwart, 9

S. 52.

- (9) H. Wiesflecker, Meinhard der Zweite (1955), S. 195.
- (7) 高柳信一、近代プロイセン国家成立史序説、一二二頁。
- (8) 諸田実、ドイツ初期資本主義研究、九三頁註(31)。
- (9) 伊藤栄、西洋商業史、九七頁。
- (10) 村上淳一、中世農民の「自由」な借地について、法協八二の五、三〇頁。
- (11) 会田雄次、(舊評)、西洋史学二九、七〇頁上段。
- (12) ただし近時、前掲良爾、ドイツ農民戦争における政治綱領、(佐賀大学教養部研究紀要第七卷)三五頁以下は、ティロール農民戦争におけるメラン綱領およびガイスマイル綱領を詳細に分析したティロール史にとりくむ。
- (13) Brandis Josef von, Geschichte der Landesaupleute von Tirol (1850)
- (14) Richard Heuberger, Zur Einsetzung der zehn Landpfleger 1312, in: Zeitschrift des Ferdinandeums für Tirol und Vorarlberg, 3 Folge, Bd. 59 (1915)
- (15) Otto Stolz, Die Urkunden über die Vergabung der landesfürstlichen Ämter in Tirol im 14. und 15. Jahrh., in: Archivaltische Zeitschrift 50/51 (1955)

- (16) Schwind = Dopsch, Ausgewählte Urkunden (1895)
- (17) Franz Bastian, Oberdeutsche Kaufleute in den älteren Tiroler Raithbüchern (1931)
- (18) Alois Zauner, Das älteste Tiroler Kanzleiregister (1308—1315), Fontes Rerum Austriacarum II, 78 (1967)

一 官職譲与の文書概観

(一) 官職譲与の文書として本節では、領邦君主による(a)地方官職の譲渡^{フエアガブツク}の文書のみならず、同じく君主発行の(b)中央官職および(c)地方官職の任命^{ベレシュタムク}の文書、さらに官職保有者が君主宛に出す(d)官職請書^{アムツツエ}(対証)をも含めておきたい。本節後段で、次節以下の行論の便宜上以上(a)(b)(c)(d)それぞれの一例を試訳したい。

これら諸文書は、現在ウィーン公文庫、インスブルック政庁文庫、およびミュンヘン官文庫伯領ティロール部^{ゴアツクス}、の所蔵の羊皮紙ないし紙片原本、および三文庫の手頭本^{ヘンリッヒ}所収の写本、からなる。このうち、筆者が参照しえた範囲内というならば原本(これは上述(b)(c)(d)に多い)の数は少ない。すなわち、(b)(c)中央および地方官職の任命文書七点のうち三点が写本、四点が原本、(d)官職請書五点のうち一点が写本四点が原本である。これに対し多数を占めるのが(a)地方官職

譲渡の文書で、利用しえたのは四五点程であるが、これはすべて領邦文書部記録簿に登録された写本である。従って、自然、次節以下はこの(a)を多く素材とすることとなるが、しかし数で少ないが(b)(c)(d)はそこに盛られた内容(これは官職譲渡の現象を別の面より報ずる)に着目すれば、次節以下での諸問題の解明に寄与することと思われる。これが、(a)のみならず(b)(c)(d)例の試訳をもあえておこなう所以である。

ところで、上述のごとく本稿が紹介する(a)(そして(b)(c)(d)の一部)は文書部記録簿に記入収録されたものだったが、この記録簿の作製こそは、形成期領邦文書部の大きな業績のひとつであったのであり、このため官職譲与の文書の試訳に移る前に、文書部の活動と記録簿の成立とに簡単にでもふれておかななくてはならない。また、次節以下で主として対象とするのは領邦地方行政上の諸問題であるが、地方行政の具体的態様は、次第に活発化する中央行政とかかわらせてこそよく理解されるのであり、この意味でもここで中央行政の一面面を取り出しておくことが必要である。以下における文書部制度史の素描は、ゲルツ伯家出身の君主(ティロール伯IIケルンテン大公)たち(マインハルド二世、ルードヴィッヒ、オットー、ハインリッヒ)の統治期(一二五八年—一三三五年)を中心にすえたい。この時期に基礎を置いた中央行政機構は、その後の支配家である、ルクセンブルク家、ヴィッテルスバッハ家、ハーブスブルク家によっても継承されていった。

(19) やれやれ、Haus-, Hof- und Staatsarchiv, Codex Wien (= W. C.)、Landesregierungsarchiv, Codex Innsbruck (= L. C.)、Hauptstaatsarchiv, Tirol Gratschaft, Codex München (= M. C.) など。

(20) Original Pergament Landesregierungsarchiv Innsbruck (1335 Mai 6 の文書) Original in Bibliothek Tirol 973, 21b Museum Ferdinandeum Innsbruck (1346 Feb. 21) Original Haus-, Hof- und Staatsarchiv Wien (1363 Dez. 13) Original-Papier Landesregierungsarchiv Innsbruck Urkundensammlung Nr. 1 1167 (1476 August 9)。

(21) Original-Pergament Siegel Landesregierungsarchiv Innsbruck Urkundensammlung Nr. 1 1094 (1411 März 3) 1100 (1396 Juli 20) 1105 (1402 Juli 7) 1128 (1465 März 22)。

(22) 以下の手続本などの類。W. C. Nr. 384, 389, 391, 394, 398, 401, 402, 415, 503; L. C. Nr. 18, 59, 105, 106, 277, 280, 286; M. C. Nr. 4, 8, 11, 12. (W. C. の書は Böhmer, Die Handschriften des K. K. Haus-, Hof- und Staatsarchiv (1873) 筆者未見 II の分類に依る)。

(11) すなわち二世紀から三世紀前半期には、ドイツの

諸侯は、もっぱら受取人作製文書に頼るということなく、文書部作製の文書をもっていた。⁽²³⁾しかし、領邦文書部が多少とも組織的に整備されるのは各領邦ごとに詳しい年代は異なるが、ほぼ一三世紀中頃ないし末期から一四世紀はじめにかけてであった。⁽²⁴⁾本稿であつかう伯領ティロールにおける文書部組織化の端初は、ティロール伯の領域権力の確立と並行して一二八〇年代初期であった。

ティロール伯はすでに、君主官廷の礼拝堂付属司祭 (capellanus)⁽²⁵⁾、ティロール城塞周域教区の司祭 (例えば scriba, plebanus de Maerdinga)⁽²⁶⁾、公証人 (俗人) (例えば notarius de Bozano)⁽²⁷⁾、ノリクヤン司教座聖堂参事会員 (例えば Rudolfus canonicus Briximensis)⁽²⁸⁾ からなつた個々の官廷書記を身近かにもつていた (他の領邦君主もほぼ同じ事情である)。マインハルト二世は、一二六〇年頃は四名、一二七一年以後は七名、一二八〇年以降一〇名の書記を有した。⁽²⁹⁾これら書記 (scriba, notarius) が指導者のもとに一個の領邦文書部を組織するに至つたのがかの一二八〇年代初期であつたのである。この文書部がどんな組織をもちいかなる文書を作製したかは後述するとして、まず以下で何が文書部組織化の契機となつたかをみておきたい。

中央行政の諸職務が未分化のままにあつた君主内府 (curia) において、事務専門化はますます、君主の財政的必要に応じうる財源の確保を図ることに始まり、それは、この財源確保および活用に従事する財務官 (camerarius) の任命に具体的に

あらわれた。ティロールにおいては一二八〇年代はじめに、はじめて *camerarius Ortolfus* の名が財務部門の指導者として文書証人欄（一二八二年一月一六日付）にみえた。こうした財務官職の設置の背景にこそ文書部組織化の契機がひそんでいた。換言すれば、「財政業務が、文書部内部における活動の本質的な要素であった」のである。この点を説明すれば次のことである。

一二七〇年代初期には財政業務は、未だ宮廷書記による一報告事項としておこなわれていたにすぎない。他方行政における記録（書面）化傾向は領邦完結化をめざす君主権力の伸張に伴ない、一層進んだ。つまり、君主は当然、「自分の領邦がどれほどの財政上軍事上の人的、物的資源を有するか」の概観をえようとしたからである。行政書面化の成果ははやくも一二七五年頃あらわれた。すなわち、他領邦に先がけてティロールにおいてこの頃はじめて課税台帳（人民の誰が租税として貨幣をいくら収めるべきであるかを記した一覧帳）が領域の一部（イームストおよびランデックの両裁判区）につきであるが、作製されたからである。この課税台帳作製は当時の宮廷書記の活動の所産であったが、君主のあるべき収入を帳面に記載するという企てにはすでに、中央行政財務部門の専門化の志向がうかがえる。この志向の結果が一二八二年に名をみせたかの *camerarius Ortolfus* の任命であった。そしてその後「一二八八年ないし一二九〇年には一名の指導者のもとに、すでに八名の財務官（*camerarii*）とその属吏（*scribae camerarii*）」

とが専門に宮廷財務部に勤務する⁽³⁵⁾状態が史料上確認されるのである。ところで、このような領邦財務部（*camera*）の組織化は、財務業務におけるとりわけ書面作製の活動に負い、この活動は宮廷書記が投入されることによってはじめて果たされたのである。

この間の事情は、次のひとつの事実注目することによって理解できる。すなわち、財務部付の専門書記官はつねにただひとりしか置かれていなく、同僚書記官は知られていなかった（「かの財務部書記官」*nuncius notarius camere* なるいいまわしも参照）ことである。しかるに、書記官に負わせられるはずの筆記業務はいうまでもなく少なくなかったし、これに加えて財務官自身は通常書記業務には携わらず、「ただ例外的に個々の覚え書を記すのみ」であった。このような事情のもとにあつてもなお財務部書記官が終始ただひとりしか任命されなかったというこの背後には、宮廷書記が財務部の書記作業に加わり一名の財務部書記官に当然課せられるはずの大きな負担は、すでに彼らによって分担させられていた事態があつたに違いない。

財務部門の業務をひきうけることを通じ、宮廷書記たちはここに整備された一個の文書部を新たに作りあげていったのである。（従来の宮廷書記 *scriba* あるいは *scriba* から文書部書記官 *notarius* への役職名の変化は確かにひとつには時代の一様ではあったが、*notarius* という「称号は、文書部が基礎を固めるとともに、すでにもう確立していた」）のであ

る。(45) 次第に文書部書記官の仕事量が増加するに⁽⁴⁶⁾ 応じ、文書部は領邦中央行政の中軸を構成するに至り、これにより「やがてラ⁽⁴⁷⁾ンデスヘルンシャフトの真の中央官庁となった」。これに対し財務部は多かれ少なかれその本来の職務を文書部に移すこと⁽⁴⁸⁾ によって、一歩後退した地位を占めることにす⁽⁴⁹⁾ になった。

(23) Bresslau, op. cit., S. 614.

(24) ここに「文書部が組織的に整備される」とは、当該文書部において「全く規則的〔日常的〕に、そして、一定の外部の形態〔例えば発行文書の紙片ないし羊皮紙の大きさ、筆記方法、印章の形等〕および一定の内部的形態〔例えば文書の前文、主文、結文〕を伴って、発行者の処分〔例えば君主による寄進〕が文書に作製される」状態を指し、従って「*cancellarius*、*protonotarius*」

notarius の名称がしばしば用いられても、これらは直ちに組織的に整備された文書部の存在を示すものではなく、ただ、「司教および世俗の有力者が特定の聖職者を書記として用いていたという自明の事実を確認するにすぎない」のである (Redlich, Die Privaturkunden des Mittelalters, S. 125)。

(25) Ibid., S. 157 参照。

(26) 後世からの一例、*Item (adit) domino Thome capellano et Lud (wico) notario ducis H (eintrici) libras 30 iussu ducis H.* (1299 Juli 16, ティロール公

塞のブルクツラーフの会計報告書。R. Heuberger, Das Urkunden-u. Kanzleiwesen der Grafen v. Tirol, MIOG, Erg.-Bd 9, S. 118, Anm. 2. 会計報告書の引用はこれを例にしている。H 118, 2 と以下略記する。)

(27) 君主は聖職者を書記として用いようとするとき彼に禄として教区司祭職を与えた。教区司祭はティロール城塞(宮廷)で業務に就くため彼不在の教区には代行司祭(Vikar)が置かれこれに⁽⁵⁰⁾ *pensio* が支払われた (Vgl. H. Fichtenau, Die Kanzlei der letzten Babenberger, MIOG, 56, S. 241)。⁽⁵¹⁾ 従って与えられる教区は実入りの大きい地域でなければならず、君主直轄領域 (*preboscitur*) を多く含む教区が選ばれたのである。この場合君主は管区司教 (トリエント司教) に対し聖職禄者推薦権を主張した。

(28) 後世からの一例、*Item dominus ordinavit David notario de Merano pro laboribus suis et literis scriptis et scribendis libras 50.* (1320 März 16, Passajer 裁判区会計報告書 H 167, 3)

(29) 君主は当初、礼拝堂付き司祭以外には書記として多く公証人を用いていたが、次第に「法律〔カノン法〕的教養」ある人士を登用し、ためか *magister* の称号をもつ司教座聖堂参事会員が選ばれた (vgl. Heuberger, op. cit., S. 124)。

(30) Wiesflecker, op. cit., S. 189.

- (31) Heuberger, op.cit., S. 100. Anm. 3.
 (32) Wiesflecker, op. cit., S. 191.
 (33) Ibid., S. 194.
 (34) Redlich, Privaturkunden, S. 154.
 (35) 拙稿「領邦ティロール農村部における租税制度」法制史研究二五、一二九頁註(41)の本文を参照。
 (36) Redlich, op. cit., S. 160. 註(1)に Kogler, Das landesfürstliche Steuerwesen in Tirol, Abg. 90, S. 464 ff. 参照。
 (37) ただし、一部領域ではティロール伯の地方官としての財務官(これは中央官 *camerarii* あるいは *camerarii de Tyrol* に対し、*camerarii domini* と呼ばれた。)がすでに一二世紀の初めより存在したといわれており(例えば後世の事例であるが Thaur 裁判区における塩坑所管理官 Engelinus の会計報告 1318 Aug. 28 Hall. Item *(dedit) camerarii duobus residentibus in duabus domibus in Taw Veronensium marcas 9 libras 7 de gracia speciali*, H101, 6)「従って」Imst 及び Landeck の両ラント裁判所にも特別にこの種の地方官が存在したともいえる。さらに、地方の裁判官あるいは所領管理人自身も固有の書記役を従えることがあり(例えば、後世の事例より Item *Vrico notario domini Seyfidi marcas 7. 1325 April 9 Tirol*, Rattenberg の裁判官の報告 409234 Item *Bertholdo notario Wernini*

- prepositi de Inspruka vini carradas 4. インスブルックの所領管理人一二三二年十一月の会計報告*。H 112, 7) 以上を考慮すると本文の課税台帳は地方単位で作製されたともみれる。
 (38) この一二七五年以前にはすでに一二六六年に、マインハルト二世がトリエント司教領に対し事実上権力を行使すると並行して、司教領所属の所領の収益、および当所領における司教の権利を筆記した土地台帳類似の明細帳がつくられており、これには、事柄が南ティロール領域に關わっていることより、公証人作製公正証書の形式がとられた(Heuberger, op. cit., S. 330)。このような一例からでも、後述する通り(註(84)参照)、行政の書面化の企てには、公正証書制度の影響がいかに大きかったかがわかる。
 (39) Wiesflecker, op. cit., S. 194.
 (40) 後に「財務部長官」という特別の名称もあらわれた(Item *quondam magistro camere domini libras 10. 1322 Mai 31. Tirol. Lueg 4445 Toll の税関吏の報告* H 101, 1)。
 (41) Heuberger, op.cit., S. 112. Anm. 2, 40523 S. 102 を参照。
 (42) Ibid., S. 115. Anm. 1. 財務官が携帯した覚え書帳が知られつゝ (Racionem dictorum prelatorum *quere in libro camerarii iuxta racionem Nykolai et Danti de Griez. 1303 Mai 3 Gries. ヌリースのト*

ヘンスタートル〔金貨業者〕ギームスとヨハネスの会計報告⁴² H268, 2)。

- (42) これに引き後世の会計報告書より具体的にうかがえる事例。(イ)裁判官のおこなった会計報告に対する検査⁴³ *Constat hec ratio Rud [olfo] et Laur [encio] notariis curie et Ottom Chertlingerio*, (1302 Juni 4, Petersberg 裁判官⁴⁴ H170, 6) (ロ)租税徴収⁴⁵ *Item ad expensas dominorum Wernheri de Tablat, Jacobi de Rottenburgh, Ch [unradi] purchgravi, Nyclini notarii exigencium stirram ungulariam in proximo mense aprilis publici multas 21, vini urnas 21/2 Veron, libras 35*, (1307 Mai 25, Zenoburg, F(friedrich) Viscpoche の裁判官⁴⁶ H 171, 3) (ハ)領土上の租税徴収⁴⁷ *Item ad expensas notariorum in racione et extra siliginis multas 3 libras 4 grossos*, (1313 Nov. 17, Zenoburg, Kellner Chunrad Rmetzel の裁判官⁴⁸ H 171, 4) (ニ)田舎地没収課税⁴⁹ *Item ad expensas dominorum Syfridi de Rotenberch, Heinrich Eusterii, Wilhalmi Stamphardi et Nycolay notarii inquisitorum Veron, libras 39 orde gal. 15 per literas predicti domini Seyfridi*, (1315 Juli 5, Tirol, Mühlbach 裁判官⁵⁰ H172, 2) 等⁵¹
- (44) Heuberger, op. cit., S. 118.
- (45) この例として、書記官が財務官に代わり(財務官の名

で)裁判官より裁判区収入の一部を受けとるという⁵² *Ex hiis dedit Laurencio notario vice camerarii ante eius rationem Veron, marcas 8* (1298 Juni 11, Tirol, Glurns 裁判官⁵³ H173, 1) 書記官が携持した帳面が没収された⁵⁴ *(litter rufus quondam Laurencii notarii*, 1315 März 13, Tirol, ヴァンの裁判官の報告⁵⁵ H304, 3)。

- (46) これに引き書記官長(後述)および書記官が、官廷長官(hofmeister)および君主直屬顧問官の主要メンバーとなる(この点については1302 Febr. 27, Gries, Enn裁判官⁵⁶の報告を参照⁵⁷) *Item dedit magistro curie et magistro H. preposito in Volchenmarcht missis per dominum ad dominum F (ridricum) regem Romanorum ad Remm pro expensis marcas 40*, H 173, 6, 註(四)参照⁵⁸)。このように、君主の公使使節の任務に就くなど(この点については後述) *Item Sigardo notario misso in Nurenberch pro sponsa domini de Braunsweich Veron, marcas 8*, 1316 Juni 2, Innsbruck の Kellner Chunrad Prichsner の裁判官⁵⁹ H173, 7) などの事情を加えてみる。

- (47) K. Kroeschell, Deutsche Rechtsgeschichte II, S. 196.
- (48) 文書部指導者⁶⁰ *prototonarius* (後述)であると同時に後には財務部長官(*vice dominus*)の地位にも就いた。

一二八五年頃には彼のもとに一〇名の書記官と五名の財務官とが共働していた (Wiesflecker, op. cit. S. 191.)。 (49) 「一四世紀には、彼ら〔財務官〕は再び、一層後退した存在になったようである。彼らは〔裁判官のおこなう〕会計報告を聴聞する委員会にもはや姿をほとんどみせなくなる。彼らに代わってこの〔聴聞の〕機会に繰り返しブルクグラフフォンティロールが名を呼ばれるのである」 (Th. Mayer, Beiträge z. Geschichte der bayerischen Finanzverwaltung im späteren Mittelalter, S. 113)。「十三世紀」イェルンに「S. Hofmann, Urkundenwesen, Kanzlei und Regierungssystem der Herzoge von Bayern, S. 140.

(三) さて、新しい領邦文書部はこうして一二八〇年代初期以降発足した。この点は、(i) 新組織、(ii) 文書部作製君主文書、(iii) 新しい筆記活動、の三側面にうかがえる。順次概言すれば次のごとくである。

(i) 新組織の形成は文書部書記官長 (Protolotarius) の任命をもって始まった。いわば「新たな人材」の登用はすべて、未だ明確に「職務権限の」画定された官職法のみられなかった時代にあつては、ほとんどつねに、従来の制度に対し特定の変革をもたらした⁽⁵⁰⁾のである。最初 (一二八二年以降) の書記官長は、ザクセン選定侯領出身の聖職者でマイセンのルードルフ (トリエント司教座聖堂参事会員、マギスタアの称号をも

⁽⁵¹⁾ ついで、ベネディクト派修道院イーズニイの元修道士でシュワーベン人のルードルフ (ティロールの教区司祭、一二〇六年没⁽⁵²⁾)。そして (おそらく俗人) ラウレンツ (一二〇八年没⁽⁵³⁾) と続いた。

これら書記官長のもとで一二八〇年代には既述のごとく一〇名の書記官が職務にあたっていた。「まだしばしば聖職者が任用され⁽⁵⁴⁾」た書記官長職とは違って、書記官職にはすでに市民および農民身分 (彼らは小土地所有者でもあった) が就く場合が多かった。これは、アルプス越え通商路と結びつきティロール領邦の金融業務に携わったフィレンツェ商人 (金貨業者) の活動による「書面主義の全般的な急速な増加⁽⁵⁵⁾」から、また南ティロールの俗人公証人制度をならって (因みに公正証書は全くラテン語文⁽⁵⁶⁾)、さらにティロール領域のもつ歴史地理的環境から、彼ら俗人も他領邦人民に比べ容易にラテン語を修得しえたことによるといわれる。このような書記官長および書記官は、君主と緊密ペルゼンリッヒな関係を保ち、「レーンを受ける資格を認められて身分的上昇を遂げ⁽⁵⁷⁾」えた領邦ミニステリアーレン (従つて彼らは、「レーンミニステリアーレン」となる) とは異なる、不自由ミニステリアーレン (familia ducis) から登用され、ファミリアーリス (familiars) なる特別の肩書を帯び、あるいはプレベンダーリウス (prebendarius) と呼ばれる仲間の一員であつた⁽⁵⁸⁾。

文書部にはさらに下役の書記官も属した。彼らは、おそらくは書記官長ないし書記官の私的書記であつた。これには、

notarius domus Tyrolis (ちやうじけしき *scriba in Tirol*) (城塞書記⁽⁸⁹⁾、ちやうじ *notarius coquina* (厨房書記) が含まれた。彼らは、君主田舎の家計業務に携わり、この意味で、財務役人ともみなされる⁽⁹⁰⁾。ところで、以上述べた書記官長および諸書記官が一種近代的な一定の官職序列 (Protonotar — Notar — Schreiber) にあつたとは考えてはならぬ。同一の人間が Notar としつゝあらわれ、ついで Protonotar となりその後またや Notar と呼ばれたことがある⁽⁹¹⁾。たしかである⁽⁹²⁾。

- (50) Mayer, op. cit., S. 112.
- (51) *secretarius ducum Carinthie* と呼ばれた (一二九七 年)° Wiesflecker, op. cit., S. 193, Anm 3 (S. 335).
- (52) *Ex hiis assignauerunt quondam domino Rudolpho de Ysnina, notario Tyrol(ensi), per 12 litteras sigillatas ipsius domini Rudolphi Veron. marcas 593 libras 3 solidos 10* (1309 März 3 Tirol. Swiker von Marling の著書 Linkardis の全註釋)° H 143, 5)
- (53) *Item Laurencio notario ad canipam in Gries tempore, quo ipse profuit canipe ibidem, vini carradas 14 minus urna 1 Bozanensis mensure* (1302 Jan. 30 Tirol. Enn 裁判区会計報告)° H 175, 4)
- (54) シュタイヌスリーベリッヒ、ドイッチン法制史概説、三七頁。
- (55) シュタイヌス、一四世紀後半の、この最高書記官は

Kanzler の官職名をえた(彼に下屬する書記は Schreiber である)° E. Rosenthal, Geschichte des Gerichtswesens u. der Verwaltungsorganisation Bayerns I, S. 270.

- (56) Heuberger, op. cit., S. 131—132. この点は帝國文書部や他領邦文書部に先じていた。また、財務官も市民身分が与えられた (Ibid., S. 106)。
- (57) Ibid., S. 87.

(58) Ibid., S. 128. 会計報告書にはしばしば「公正証書作製のため公証人に支払われる代価」がみえ、公正証書の普及の一端がうかがえる。Item eadem Ottilino (notario de Bozano) ordinavit dominus Wer (inherens) de Tablato pro precio litterarum et publicorum instrumentorum multorum super negociis et iuribus domini inorum ducum et tractatum Tridentinarum Veron. libras 34 (1313 März 23. Gries. Gries 裁判区会計報告)° H 167, 6)

- (59) かつての伯領フュンチガウの全領域 (このフュンチガウの出身地域であつた) は當時、依然としてローン語が国語として話られていた (Heuberger, op. cit., S. 129)。
- (60) 拙稿、伯領フュンチガウにおけるラント法的構造 (二)、熊本法学三三、一一九頁も参照。

(61) 彼らが子供をもつてゐた (例えば 1303 Mai 17. Tirol. Sarnthein 裁判区会計報告。Item de bonis, que

- fuernnt Eberlini filii F(ridrici) notarii in Hurlach, libre 5 deficiunt propter alluiones.* H 126. 5)
 じゅう 真正の俗人書記官たる証拠となる。
- (16) Herberger, op. cit., S. 132.
- (17) 中村賢二郎『身分制期領邦国家論』『封建国家の権力構造』所収 五二八頁。
- (18) Wiesflecker, op. cit., S. 187.
- (19) 前掲拙稿『一六一頁註(2)参照』
- (20) 一例、一三〇九年八月一〇日タイローンに於ける
dilectus familiaris noster Lud(wicus), notarius de valle Saunie の於ける君主の租税記録 (Zauner, op. cit., S. 63, Nr. 23.)
- (21) *Item [dedit] ipsi Ch [unrado] et not [ariis] et ceteris prebendaris libras 27 grossos 10.* (1314 April 1. 金計報告) ロンター ヲマナーの金計報告
 H 135. 2)
- (22) 例、タイマンの金計報告 (*Item Ch [unrado] notario quondam Laurentii [notarii Tyrolensis] libras 15 pro colligenda stiura peditali.* (1309 März 7. Tirol. Enn 裁判所金計報告) H 147. 2)。
- (23) *Item Liebaro scribe in Tirol libras 20 per literas ducis H(einrici).* (1302 Sept. 28 Tirol. Laas 裁判官の金計報告) H 139. 2)
- (24) *Item dominus ordinavit Nikolao notario coquine*
 - - Veron, *marcas 20 - -, super quibus dominus F(ridericus) prepositus Brixinensis habet litteram domini.* (1323. H 140. 1)
- (25) *Item dederunt - - ad expensas domini Veron, marcas 10 libras 6, quas assignauerunt Suikero magistro coquine et Nikolao notario coquine.* (1321 Juli 17 Meran. マーメン貨幣鑄造所保有者の金計報告) H 140. 3) を参照。
- (26) Vgl. H. Fichtenau, op. cit., S. 246.
- (27) 例、タイマンのロンターマニヤ (註(25)) の
dominus Rudolfus notarius curie nostre
 (1281) ' *Dominus Bertholdus de Ysnina, prothonotarius dominorum ducum* (1306) ' *dominus Rudolfus de Ysnina, notarius Tyrol (ensis)* (1309) (Heuberger, op. cit., S. 143, Ann. 5; 144, Ann. 5; 146, Ann. 4)
- (28) ただし Heuberger, op. cit., S. 165 タイローン文書部が帝国文書部を模範としたことを理由に、一定の言職序列を認めよう。
- (29) 以上の組織の文書部は、特権状 (*privilegium, haufest*) などの金状 (*littera*) の定式化した君主証書が作製されたのである。この君主証書 (古文書学でいう私文書) は、証明手段に君主の印章を用いた捺印証書である。

証書主本文旨 (Dispositio) を将来にわたり確固たるものにするため捺印をおこなうの旨は、文書主本文尾 (Corroboratio) で述べられたが、これによると、印章は君主のみが捺す以外に、君主と並び共同捺印者もみられた。⁽⁷⁶⁾

しかし、君主による処分の文書に添えたこの共同捺印者の捺印が、果たして嚴格に「第三者の法行為についても權威ある認証を与え」る捺印 (Siegel in fremder Sache) であつたかは疑問である。ただし、共同捺印が第三者 (君主) の処分に対する同意の意思表示であつたとき (換言すれば、第三者 (君主) が処分に際して共同捺印者の同意を必要としたとき) は、それは第三者の法行為にでなく共同捺印者自身の法行為につき行う捺印とみなされたからである。第三者の捺印が、本人の法行為の「同意」でなくまさしく法行為の「証明」を示す (この場合の捺印者が「法的効力を付与する權威的捺印者」である) 事例は、われわれのあつかう文書では、後述の官職譲与書 (この譲与書は文書部記録簿に登録されたものである。) にみえる。この文書の結文では、本人 (官職就任者) は第三者 (ここでは騎士身分) の捺印を懇請し、懇請と被懇請者による捺印との事実を証人 (Zeugen der beie um das insiegel) によつて証明している。この場合、被懇請者は文書の内容が真実であることにつき責任をもつが、文書の内容の法的効果には関わないことを示すため、被懇請者の捺印行為が被懇請者本人 (および彼の相続人) の損害とならぬ (an schaden) ことが述べられた。このようにして、「本人が自分自身の事柄のために捺す印章

と、高貴な身分の者および定評ある団体が第三者の事柄のために捺す印章とは、(当時の) 一般的觀念によれば、もともと國王証書のみが獲得した完全な証明力と非難不可能性を (私証書に対し) 保証した」のである。⁽⁷⁷⁾ このような捺印証書は、受取人作製文書をますます稀なものにし、また、トリエントはいうまでもなくボーヴェンやブリクセンにまで進出していたイタリアの公証人作製公正証書 (Instrumentum publicum) をも抑えた。これらのことには、ティロールの君主証書が、私証書のもつ一般的趨勢以上に、特に忠実に國王証書を模範とした事情 (因みにマインハルト二世と皇帝權力との密接な結びつきを想え) も関わっている。かくしてかつて國王証書において起つた (すなわち「國王証書は」やがて最も確実な証憑方法となり、私証書の模範となつた) と同じことが、ティロール君主の文書部作製捺印証書にも他の私文書に對し始まつたのである。

(74) 高級聖職者個人とともに司教座聖堂參事会もすでに古く自身の印章をもつたし、世俗諸侯個人とともに一二世紀後半より一三世紀には、都市当局も固有の印章を行使した (Breslau, op. cit., S. 709—710) が、領邦の文書部が自身の印章をもつたか否かは文献にはみえない。ただ、バイエルンでは、大公の印章が文章部書記官長に預けられた (Rosenthal, op. cit., S. 288) がこの意味での文書部印章がいえるかもしれない。

- (75) 一例(オットー大公による裁判区の質入れ。一三〇九年三月一日)。*Und daz daz also stete und veste beibe, so hab wir disen prief versigelt mit unserm insigel und mit den insigeln unsere getriwen Vri- (ich) des Rühmer, H (ainrich) von Rotenburg unsers hofmaisters, H (ainrich) des marschalkes, Wer (hers) von Tablat und Her (mann) Bing. (Zauner, S. 57, Nr. 14.)*
- (76) 木村豊「ブルクレーヒト考」史学雑誌七七の二二—二二頁。
- (77) 「父マインハルトとは異なり、オットーは、政務につき側近顧問(宮廷官職保有者、註(75)の共同捺印者参照)のみならずラントの有力者(*potiores terrae*)の同意に拘束された点は、*Jäger, Geschichte der landständischen Verfassung Tirols 2—1, S. 15—16*参照」
- (78) Vgl. Redlich, op. cit., S. 119. 木村豊前掲論文は「*当*」(アットヴァイク修道)院を当事者の一方とするブルクレーヒト証書は、(Ⅰ)院長、(Ⅱ)修道士会、の二印を以て自己完結的な証明力をもったと述べ、修道士会の印を「第三者(この場合院長)の法行為について權威ある認証を与え」る印章とみるが、この印章の意味も本文のごとく解釈できないか。
- (79) 註(18)の本文参照。
- (80) Redlich, op. cit., S. 120.
- (81) Ibid., S. 119.
- (82) Ibid., S. 129.
- (83) ギーシェンの公証人ヤコブ・ハースはすでに一二三七年ドイツの地では最初の公正証書記録簿を作製した(Conrad, Deutsche Rechtsgeschichte, I, S. 371)。
- (84) これを説明すれば次の通りである。他の領邦史に対し領邦ティロール形成史上決定的に重要な点は、ランデスベルンシャフトが後世伯領ティロールとなる全領域をおおっていたトリエント、ブリクセン、クルールの「司教座聖界諸侯の支配を克服する過程ではじめて生まれた」(Heßling, österr. Verfassungs- u. Verwaltungsgeschichte, S. 56)ことである。ティロール伯にとってとりわけ問題であったのは、後世伯領の枢軸部を形づくった地域(エッチェラント)をひろくしかも強固に支配したトリエントの司教権力であった。この点は文書作製の上にも示されており、この領域にはすでに「よくから公正証書(Notarial-instrument)が支配していた。ティロール伯はエッチェラントに対しルードルフ・フォン・ハーパスブルクの権力を背後にえて領域権力を樹立しようとしたのであり、これは、文書作製上も当時ドイツに支配した捺印証書とイタリアの公正証書との融合の企てにあらわれた。当初は公正証書の個々の文書定式の模倣が君主証書についてみられたが、次第に(ほぼ一二七〇年代初期以降)それも稀となり、ついに公証人は君主証書の作製には携わらなくなつた。(ただし、君主がラント裁判所等の諸役人に向って発

する一時の行政令状 *littera* は公証人によって作製された場合もあった。註(58)参照。捺印証書の浸透を図る君主は、ついに、公正証書の効力に関し規則を發布し、本来無捺印の公正証書に対し君主の印章が捺されるまでに至ったのである。（このことはすでに一二世紀末にトリエント司教が個々行っていたことではあったが。）Heubeger, *op. cit.* S. 67—68. 以上のように、文書作製上の様式の変化によっても領域権力の確立度が計られうるわけである。

(85) Vgl. Breslau, *op. cit.* S. 693.

(86) マインハルトとルードルフ国王との結びつきは註(84)にふれたが、さらにマインハルトは後の国王アルブレヒトの舅であり、且つ若きシュタウフェン家の王コンラート・ディンの継父でもあった。マインハルトの親皇帝傾向は、ティロール領邦形成の先駆者アルベルト三世（一二五三年没）以来のものである（前掲拙稿、一三四頁註(61)本文参照。）

(87) 国王文書部とティロール文書部との間を書記職を通じて媒介したブリクセン、トリエントの司教ないし両司教座聖堂参事会員の働きも無視できない。また会計報告書には一四世紀初め国王書記官のひとりガティロールに土地をえて居住していたことがみえる。Item deficiunt de plebe in *Flowerlingen* libre 40 de quatuor annis nuper preteritis remisisse domino Hartmaro notario regis Rom-

anorum et amplius non deficient. (1310 Febr. 16 Tirol. Hertenberg 裁判区, H 58. 3)

(88) ミッタイス＝リッペリッヒ、前掲書、一一〇頁。

(iii) 新文書部は、以上のごとき捺印証書を作製し、あるいは記録簿に記入登録しただけではない。領邦行政の発展に応じ新たな筆記活動が始まった。すなわち、同文書部によって、一七八八年に伯領ティロール最初の大規模な土地台帳が完成し、また同年より大量の会計報告書が記録され、さらに一三〇〇年頃には領邦全ラント裁判区・直轄領、そして関税所、塩坑所、貨幣鑄造所等の年間収入の項目別一覽帳が書き上げられたのである。⁽⁸⁹⁾ このようにみると、文書部の発展は、財務行政上の必要にいかん大きく依存していたかがわかる。

以上と並び形成期ティロール文書部の新しい活動は、君主発行証書に書記官が加えた書き込みの制度であった。⁽⁹⁰⁾ これの最初は一三十四年五月七日付文書における書き込みである。（従って、この時代は上述の時期に比べ文書部がすでに強固に確立していた時期ではあったが。）この文書は君主ハインリッヒの授封証書（文書は羊皮紙原本）で、この裏側に表側のテキストと同じ手蹟で *Nucius Heinrichs de Villanders* と書き込まれている。これが書き込みの制度である。（書き込みは、原本、草稿、あるいは記録簿にもおこなわれた）。⁽⁹¹⁾ 上掲例の「伝達者ハインリッヒフォンヴィランダーズ」とは、君主の当該授封行為を文書で認証すべしとの君主の命令（ただし

これは、受封者に直ちにでも手渡されうる完成稿⁽⁸⁵⁾ 原本でなく、草稿の作製命令をいう、)を文書部書記官に伝達した者であった。すなわち、当ハインリッヒは文書作製命令に対し形式的責任(つまり文書内容に関する責任ではない)を負う人であり、書記官はこの者の名を記すことで、しかも事情によっては書き込まれた名を引き会いに出すことで彼自身の文書作製に関わる責任を果たそうとしたといえる。

ところで、この文書部書き込み制度には前史があり、これは会計報告制度と関わっていた。すなわち、裁判区裁判官(またその他官職保有者)は、君主に裁判区(官職区)会計の決算報告を出す場合、君主(ないし君主の役人)がすでに裁判官に口頭・書面で発していた支払命令の事実を報告に加え、これを会計報告の筆記者が、*assu domini ducis* (ないし) *assu purchavii* (ブルクグラフの命令により)であるいは *per litteras domini ducis* とあらわしたのである。ところが、このように君主(ないし役人)が当該裁判官に直接支払命令を下した以外に、君主は支払命令を伝達者をして裁判官に伝える場合があった。このときは、会計報告書には、*assu domini ducis nuncio N.* あるいは単に *nuncios N.* と書き添えられた。⁽⁸⁶⁾ 君主の出す文書作製命令の伝達者を書記官が当該文書に書き込む制度は、このように、君主の支払命令の伝達者を会計報告の際に記す慣行から生まれた。ここにも、財務行政と文書部の活動における密接な結びつきが知れる。

他領邦に先んじた伯領ティロール文書部の君主証書書き込み

制度は、当領邦行政において書面行政がいかに高度の段階に達していたことを示すものである。

(85) Redlich, op. cit., S. 158, 165. ントマン(十三世紀前期)にフツフ Hofmann, op. cit., S. 140.

(86) Vgl. Stolz, Die ältesten Rechnungsbücher deutscher Landesverwaltungen, HVJ 23 (1926), S. 87—8.

(87) 一裁判区(Thaur 裁判区)を例にこれを紹介すれば次の通り。(Kogler, op. cit., S. 696—697.)

Summa reddituum in Tauer.

Veronensium marce 36, libre 2½; siliginis modii 138 ½; ordeii modii 90 minus galweis 2; avene modii 92 ½; equi vecturales 169; porci 3; armenta

20; oves 190; scapule 36; agni et edi 11; anseres 15; pulli 64; ova 840.

Item Veron, libre 7 de hominibus in Vompe.

Item de bonis emptis ab illo de Vellenberch libre 74.

Item de officio ibidem dantur marce 20.

Item pro steura generali marce 30.

Item de decima in Arczelle dantur marce 10 vel 11 vel 12 marce.

Item de steura in Halle sicut occurrit.

Item in anno tercio dantur oves 40, agni 40 in

Arcelle.

Item libras 5 dat Eberhardus Huber pro exemptione omni anno.

Salina soluit secundum quod occurrit.

- (82) *Item libras 5 dat Eberhardus Huber pro exemptione Kanzleivermerke auf den Urkunden der Tiroler Landesfürsten.* MÖG 33, S. 432 ff. Vgl. Otto H. Sowasser, Die österreichischen Kanzleibücher vornehmlich des 14. Jahrhunderts und das Aufkommen der Kanzleivermerke, MÖG 35, S. 707 ff.

- (83) Heuberger, op. cit. S. 455—467. に掲げられた資料 (Nr. 1—Nr. 33, 1314—35年) を一覽するに、書き込みはすべて人名（しかもラテン語名）テキストがドイツ語文のときも然り）で、圧倒的に記録簿上のものが多い。また、書き込みは、テキストに直ぐ続けられる場合（主に草稿上のとき）、あるいはテキストの直ぐ下の行の真中あたりに特に二重の線で枠づけられる場合（主に記録簿上のとき）、記録者と書き込む者とは同一人物）等みえる。

- (94) やがて、命令伝達者の形式的責任から文書内容上の実質的責任が発展する。この場合は、伝達者たちの人的構成の面で新しい特性が生まれたが、これについては第二節でふれることになろう。

- (95) つまり書き込みは「もともとただ文書部を擁護するこ

う（Deckung der Kanzlei）ひのち奉仕した」（Slowasser, op. cit., S. 716）のである。すなわち、文書部は書き込みの手段を用いて、誰が文書部に臨時に命令を伝達したか、を記憶に留めようとしたのである。「臨時」とは、書き込みをもつ君主証書がそれ以外の君主証書に比し少数（オーストリアでは、アルブレヒト二世（1310—58）とエーコンの君主証書中わずか一冊）Ibid., S. 708）であることに基づく。

- (86) 以上の具体例とつづいての会計報告書（一二九八年一月一八日付 Jacob Hosserius の報告）Heuberger, op. cit., S. 441, Anm. 5）を紹介しよう。

Item domino Vioni de Slandersperch marcas XX per literas domini ducis. Item Villino de Leuenberch marcas X iussu domini ducis Ludwici Item Dietlino de Furmian marcas XX per literas domini ducis Ottonis.....Item magistro H (eintrico) Schillerio marcas X per literas domini Ludwici et marcas X nuncio Jacolino Volterio. Item Villino Wagench-necht libras XII iussu domini ducis Ludwici nuncio Kennengast.....Item Chunrado Marstallerio per literas ipsius Chunradi.

- (87) Redlich, op. cit., S. 167 ff. はティロールの場合を知らない。帝国文書部ではカール四世時代に、領邦では一四世紀中頃にみられた。オーストリアではルードルフ四

世代(一三五八—六五)に多くなり、この場合もはや *nuncius N.* とだけ述べられるのでなく、例えば *dominus dux per Ch. notarium camere nunciavit et postea per se ipsum audiuit in consilio* (133) と書き込まれた。(因みにこの一三三三年の一例に示された書き込みは、君主が財務部書記官をして文書部に伝えさせた命令が、文書受取人に直ぐにも手渡しできる完成稿⁽⁹³⁾ 原本の作製命令であったことを物語り、この点で上掲ティロールにおける草稿作製命令とは異なつた。)

(四) さて、既述した(俗人)ラウレンツ以後の宮廷書記官長は、ケルンテン在フェルケルマルクト(Völkmarkt)の修道院長ハインリッヒ(一三三六年没)⁽⁹³⁾ であつた。彼は君主ハインリッヒが一時(一三〇七—一三〇年)バーメン王となつたとき君主とともにバーメンに随行し同宮廷で活動した。これに対しティロール宮廷文書部の実際上の指導者は、ブリクセン司教座聖堂参事会長(一三〇五年参事会員になる)フリードリッヒ(彼はマインハルドが市民の女との間に設けた庶子、ファミリアーリスの称号をもつ。一三三〇年没)であり、彼の活動によつて領邦文書部は中央行政において確固たる地位を築いた。⁽¹⁰⁰⁾ (文書部の実際の指導者たる彼の地位は、君主が書記官長ハインリッヒとともにティロールに帰還した以後も変化なく、ハインリッヒ自身は通常文書部の実務には就かなかつた。)⁽¹⁰¹⁾ フリードリッヒはすでに一二九〇年代に文書部に籍を置いており、会計

報告書にしばしば名をみせるごとく⁽¹⁰²⁾ 一三〇〇年頃以降財務行政をも管掌した。自らも財務行政に明るかつたことが、彼指導下の文書部の発展にいかにか寄与したかはおのずとわからう。

ティロール文書部記録簿の作製こそは、まさに、このフリードリッヒ書記官の活動に負うのである。⁽¹⁰⁴⁾ ティロールにおける最初のものは、一三〇八年君主オットーのもとで登録記入がはじめられハインリッヒの統治初期の一三一五年まで続けられた記録簿である。⁽¹⁰⁵⁾ フリードリッヒの活動はこれにつき次のごとくあらわれている。⁽¹⁰⁶⁾ (i) 当記録簿に収録の君主証書のはば六割は彼ひとりにより記入され(残りは九人の書記官により記入) (君主証書作製者と記録簿記入者とは同一人物であつた)。

(ii) 収録諸証書の登録順見出し(*Nota in hoc libro sunt privilegia infrascripta*)の三分の二は彼の筆になり、さらに(iii)他の書記官が記録簿に記入登録した場合でも、登録内容につき彼が後で修正の手を入れたこともあつた。

ドイツ諸領邦における最初の証書記録簿は、ヘンネガウでつくられ(一三〇五—〇八年、伯ウィルヘルム一世)その後、トリエル(一三一年、バルトウイン大司教)、レーゲンスブルク(一三三—四〇年、ニコラウス司教)、オーストリア(一三三—一五年、フリードリッヒ美公)、マインツ(一四世紀初期以降、ゲルハルド二世大司教)と続く。⁽¹⁰⁷⁾ 多くの領邦と都市とによつて記録簿が作製されてゆくのは一四世紀の後半期であり、また上記した領邦においても記録簿制度が一層整備されたのはこの時期であり、この点で、ティロールにおけるそ

れは半世紀以上も他領邦に先じていたことがわかる。そこで以下では直接われが参見できるアロイス ツァウナー編纂の刊本を素材にティロール文書部記録簿を簡単にでも概観してきた。

(98) 一三二〇年一月二六日ティロール（城塞）で作製された公正証書にみえる証人欄参照。 *in presencia domini Fridrici summi prepositi ecclesie Brixinensis, magistri Henrici prepositi ecclesie in Volchenmarch notariorum curie subscripti regis.* (Heuberger, Urkundenwesen. S. 149. Ann. 5)

(99) この時期に「ヴェーメンにティロールより Anweisungssystem が導入された。従来ヴェーメンでは君主の債務銷却は土地の単なる贈与でもって果たされるといふ原始的方法がおこなわれていたが、ハインリッヒの時代より君主發行賃入れ証書があらわれた (Ibid. S. 120) 。

(100) 各種文書部帳簿もはじめて彼の手で作製された。例えば証書草稿帳 (Liber notularum domini Fridrici) prepositi Brixinensis inceptum anno domini MCCC XXV。支出帳 (Liber expensarum domini Fridrici) prepositi Brixinensis) 等 (Ibid. S. 159. Ann. 5)。また陛下の書記官たちにもおのおのの帳簿をもたせた (Postmodum inventum est ipsum Gwidonem dedisse ad expensas domini H. regis in nuptiis domini

factis in Insprucka in anno CCCXXVIII. de predictis prepositure Insprucka..... prout patuit in libris expensarum domini Fridrici) prepositi Brixinensis et in libris Viricis notarii coquine et in libro studentis. 1328 Nov. 16 Tirol. マンツナントの所領管理人 Guido v. Florenz の会計報告。H 268. Ann. 5)。

(101) 彼は主に高等政治に専念し君主の公使として活躍。例えば item pro expensis domini H. (eintric) prepositi de Volchenmarch missi ad ducem Bawarie pro expensis et precio navis Veron. libras 14 (1316 März 23. Zennoburg. バル塩坑所管理官の会計報告。H 173. 6) 彼が多くの私的書記官をよつた (Viricus notarius domini prepositi de Volchenmarch. 1313 Juni 18; Ruplinus notarius domini (Heintric) prepositi. 1320 Aug. 9. Sterzing; Chunradus notarius domini H. (eintric) prepositi in Volchenmarch. 1325 Sept. 21. Innsbruck. H 149. 7) のゆゑのため。

(102) 例えば会計報告の聴聞（拙稿「法制史研究」三五、九五頁註(2)参照)。担税地被災の調査（同、一二八頁註(2)参照) 会計監査 (Item Ludwico notario canere in debitis domini marcas 20. Hoc constat mihi F. preposito Brixinensi. 後段は「Salurn の Kellner の会計報告の文書にフリードリッヒ自身が書き入れたもの。H 156. 2) 等。

- (30) 一般に Bresslau, op. cit., S. 144, 741 参照。
 (31) Zauner, op. cit., S. 21.
 (32) H. Patze, Neue Typen des Geschäftsschriftgutes, Vorträge und Forschungen XII, S. 41 ff. (以下 W. G. 384 (全五〇葉 15×22cm) をなす)
 (33) Zauner, op. cit., S. 33 の書記官の登録テキストの一覽を参照。
 (34) Redich, op. cit., S. 163; Zauner, op. cit., S. 26 ff.; Patze, op. cit., S. 42 ff.
 (35) 例えば、オーストリアにおける Pfandregister, Lehenbuch の成立、およびこれら個別登録簿より一般登録簿への発展を想え (Slowasser, op. cit., S. 603 ff.)。

記録簿は、君主がいついかなる内容の文書を発行したかを概観することのできる行政上の必要から、文書部において作製された。それは君主発行文書の登録集（ないし要録集）であり、しかも登録された諸文書が一目で見分けられるように登録文書の登録番号順に見出しが、記録簿の表紙の直ぐ後にさし込まれた二枚の紙片（四頁分）にすべてラテン語で一覽表記された。すでにこの見出しよりわかる通り、登録文書はごくわずかの例外を除き、君主証書のなかでも特権状と呼ばれるものであった。⁽¹¹⁰⁾ この内容は、多くは個々の土地・家屋等の質入れ貸賃借で、次に官職の質入れ貸賃借、その他負担の免除、特定裁判権の保障等である。⁽¹¹¹⁾ このような特権状は、もはや単なる証明証書の

ではなく、当該特権状の発行によってはいじめて、特権状の内容をなす君主の法取引（例えば、土地の質入れ行為）が完結する行為証書であった。⁽¹¹²⁾

ところで、記録簿はこのように君主発行文書の登録の集成であったが、本節冒頭より知れるごとく（すなわち官職請書の場合）、君主が受け取った文書（到着文書）が、これと関係する君主発行文書と並べて通常の君主発行文書記録簿に登録されたこともあった。⁽¹¹³⁾ それは、ほとんど君主証書の対証で、記録簿には当該君主証書の記入に直ぐ続いて収録された。従って、このような場合には、「厳格な意味の記録簿とはいえなくなる」が、他面、領邦文書部が時とともにますます整備されていく（一四世紀後半期以降）と、行政の必要上到着文書の記録簿が出現することにも注目しなければならない。（すなわち、到着文書筆写簿（¹¹⁴ 謄本帳）である。）⁽¹¹⁵⁾

君主証書は通常、その原本が文書部より受取人に手渡される前に、記録簿に登録記入されたのであるが、その際ごく稀には証書内容が覚え書の形で、従って証書発行者（君主）を第三人称にして記録される（一件書類登録方式）⁽¹¹⁶⁾ こともあったが、ほとんどの場合証書の内容となる文言が（確かに形式的文言は *est* と省略されたが）⁽¹¹⁷⁾ ほぼ証書の文字通り、従って証書発行者を証書内容通り第一人称で記録された（完全登録方式）。この意味でティロール最古の記録簿（一三〇八—一五年）はいわば完全登録簿と呼びうるものであった。

ところで、君主証書の記録は一三〇八年にはじめて産まれた

のではなく、それ以前にすでに文書部で企画実行されていたが、このときの記録方式はアクトレギスタの形がとられていた。すなわち、まず君主の法取引の年月日が記録の冒頭にあげられ次に法取引の内容が君主を第三人称にして簡潔に述べられていたのである。この記録は後に草稿を複製するための準備的な覚え書であった。われわれがさしあたって知りうる一三〇八年以前のこのような一件書類式覚え書の記録は、一二九六、一二九七、一三〇六、一三〇七年のもので、これらは、当時文書部で大量に作製されていた会計報告書の中に挿入された。従って、ティロールにおける記録簿は、そもそも、会計報告書の内容からの一分岐として出発したのである。（ここにも、既述文書部書き込み制度の場合と同じ事態——すなわち財務行政と文書部の活動との結合——が知れる。）記録方式のアクトレギスタからフォルレギスタへの変化には、トリエントおよびブリクセンの両司教領でおこなわれていた封帳簿等の公簿制度からの影響がある。⁽¹²⁸⁾

次に記録は何にもとづいておこなわれたかをみよう。これには次の三通りがあった。すなわち、稀に（イ）完成した原本の筆写による記入、がみられたが、ほとんどの場合（ロ）原本完成以前の草稿そのもの（つまり草稿原本）が草稿起草者自身により、草稿完成とほぼ同時点で記入された（この場合、草稿原本が記録された後にもとづく完成稿＝原本の複製をみる）、および（ハ）草稿完成後これに従い原本が複製され、当原本にもとづき改訂を受けた草稿

（草稿原本）が記入された、という三通りである。⁽¹²⁹⁾

（イ）とは異なり（ロ）（ハ）では草稿の記録簿記入の際に種々文言が訂正された。ところで登録文書のクロノロギッシュの面をみてみるに、登録された文書の登録順序が当該文書自身の発行年月日の順序と一致しない（半年から数箇年の開きがある。）場合がしばしばみられた。これはとりわけ、上述（イ）の方法（すなわち、すでに完成して受取人に手渡っている原本を当の受取人ないしその相続人が文書部に提出し、これが筆写記入された）、および（ハ）の方法（文書部に永く保存されていた草稿が筆写記入された）に帰因する。それにもかかわらず、われわれの文書部記録簿は、（ロ）の方法による記録が比較的多数を占めるため記録簿を概観したとき、文書の発行年月日順の登録記入がほぼ維持されているのである。

このように、君主証書の記録は、ほとんど証書の草稿（これが原本であれ写本であれ）に依り、この意味で記録簿は草稿簿といえるものであったが、しかし、記録簿に証書草稿が登録記入されることは、その法的効果の点で、登録されたものの原本自体を所持することと何ら変わりはなかったのである。この点は、形式的にも、上述のごとく記録の方法から直ちにわかる。すなわち、登録された証書は大部分草稿原本であり、これが、受取人に手渡される完成稿（原本）の複製の際の写本となったからである。のみならず実質的にも、ラント裁判官が原本ではなく記録簿に記入されている文書を証明のために引き合いに出すことがあったことから知れる。⁽¹³⁰⁾この後者の

事態より、われわれは、君主証書の草稿が公簿たる記録簿に登録記入されることだけで（すなわち原本が作製され受取人に交付されるまでもなく）、草稿内容の法行為は完了するという法觀念が發展していくのを容易に読みとれよう。実際、ティロールにおいて一三四八年から一三六三年にかけて、君主証書の草稿自体の集成である草稿簿がティロール伯のブランデンブルク辺境伯ルードヴィッヒ（ヴィッテルスバハ家）、および子マインハルド三世のもとで作製されたもの⁽¹³²⁾の觀念の産物とはみれないか。

いずれにせよ、以上の意味において、次の点が指摘できる。すなわち、証書記録簿をはじめ各種文書部帳簿・官庁業務帳簿（会計報告書、課税台帳等）の作製整備の進展とともに、「原本のもつ本来の文書実体は、原本文書の発行数が巨大に脹れ上がったいくにもかかわらず、その重要性和意義との点では、『証書記録簿等の領邦・都市における公簿制度の背後に』後退する⁽¹³³⁾」のである。このようにして、本節冒頭をふりかえるに本稿が中心とする官職譲渡証書、およびその他の官職譲与の文書の一部、を収録する記録簿あるいは草稿簿のもつ歴史的位置が理解できたであらう。

(109) 見出しの作製は最初の登録年である一三〇八年から始まったのでなく、一三一一一一年春にこれまで三年分三四の登録文書につき一度に見出し作製が起こったことより開始。
第三五番目の登録文書より見出しの作製はひとつの登録に

つきひとつの見出しと順次登録ごとに始まった。初めを紹介すれば次の通り。(4) *Primo privilegium quondam Alberti Winzarii de Tyrol*. (6) *Item privilegium Chlemmouis de Sterzinga*. (7) *Item privilegium nobilis viri de Aschu, quod habet Wernhardus de Inspruka...* 必ずしも全部の登録文書に見出しがつけられたわけではないが、見出しをもたない登録はごく稀。

(110) 例えば、君主に質入れされた所領からの収益明細 (Zauner, Nr. 128)、各裁判区が収める厨房税 (*staura coquina*) 類の一覧 (Nr. 171)、大公領ケルンテンに属する君主直轄領の明細 (Nr. 172)、領内の祭市へ旅行するに際し君主より保護をうける他領都市 (Como, Verona, Bormio, Pergamo 等) 一覧 (Nr. 174)。ここにも文書部が単に *Beurkundung* の業務だけでなく、領邦財務行政の領域に関与したことが知れる。

(111) これは次の二点の理由による。(イ) 特権状は、君主と相手方との間に継続的な法関係（相互的義務関係）を設定するものであり、この点で、諸役人に対する命令、通達、委託を内容とする令状（これは羊皮紙特権状に対ししばしば紙片であった）はその一回的処置の点で、新たな法状態を創る特権状に比べ重要性が少なかった。(ロ) 後述のごとく記録簿は草稿簿たる性格をもっていたのであり、この点で、特権状とは異なり前もって草稿が作製されることなく直接紙面に書きおろされた令状は記録簿に収録

をたえなう。Heuberger, op. cit., S. 310. 令状が収録されなかったことは、われわれの眼からみれば、当時の行政の不備をあらわすものといえよう。

- (112) その登録文書の見出しの一例（一三二五年八月一〇日ティロール）*Item privilegium domini Seyfridi de Rotenburch super obligatione ducum curiarum in Fritzens, in Cholsatz pro marcis CC, anno CCCXV et nichil defalcabit* (Zauner, S. 45, Nr. 152) 8995
は（一三二一年五月二九日 Zenoberg）*Item privilegium Nykolai notarii de Sterzinga super locacione curie in Ertzier* (Ibid., S. 38, Nr. 44)

- (113) 見出し一例（一三二一年八月二四日メンン）*Item privilegium domini Ch(ernvadi) de Vuenstein super iudicio in Vltimis pro marcis V militus et defalcabit omni anno marcas CCV.* (Ibid., S. 39, Nr. 63) 8995
（一三二一年三月一日シリーズ）*Item privilegium quondam Nikolay et Danti de Florencia super locacione thelonay in Antro et in Tella.* (Ibid., S. 38, Nr. 33) 前者にいう *defalcabit* また註(112)にいう *nichil defalcabit* の意味は第三節参照。

- (114) 見出し一例（一三〇九年三月一〇日ティロール）*Item unum privilegium domini Virici de Cordo puchgravi Tyrol(is) super exemptione sture et culie honorum suorum iacencium in plebatu Enne*

(Ibid., S. 37, Nr. 12)

- (115) この見出し（ドイツ騎士団のために。一三二一年三月一日シリーズ）*Item privilegium fratrum Theonicorum super facienda iusticia solum coram domino in Tirol* (Ibid., S. 38, Nr. 35). その他権利の確認（1311 März 1, Gries, 見出し）*Item privilegium quondam Vischpekonis super bonis feodalibus et censualibus* (Ibid., S. 38, Nr. 36)。

- (116) 確かに登録文書の大部分は君主の質入れ証書であったが、しかし本文のごとく他の証書も収録されたのであり、従ってティロールのこの記録簿は決して質記録簿（オースリアはこの個別記録簿から出発した。註(108)参照）ではなく最初から一般記録簿たる地位を占めた。

- (117) O・レードリッヒは行為証書のメルクマール（ただし現実の行為証書が以下のメルクマールすべてを必ずしも備えているわけではない）を（イ）証人証明に代わって捺印証明が登場する（ロ）証書テキストが行為者第一人称（Nos）で述べられる（ハ）法取引の文言には過去形でなく現在形（例えば *donamus et tradimus*）が用いられる（ニ）動詞現在形と結びついて現在を示す付加語（例えば *profitemur presencium in tenore ; wir...verjehen mit disem priene*）があらわされる（ニ）とした（Redlich, op. cit., S. 121 ff.）。
- 単なる証明証書から行為証書への転換は一三、四世紀に起

こつたが、この転換を規定したモメントが果たして証書発行者の捺印行為（A・シュルツェに代表される見解）かに関し、Heubeger, op. cit., S. 84ff. に注目。すなわち彼はいう。行為証書の成立は直接捺印の現象には帰せられない（無論捺印は間接的に行為証書の成立を促進はしたが）。行為証書の成立は二三、四世紀という特定の歴史段階自身に求められる。すなわち法取引の活発化からくる文書証明の大量化現象、法取引に書面を用いることがもはや当然とみなされた時代観念、よりはじめて行為証書の成立が説明できる。換言すれば流通経済（例えばティールにおいてはフィレンツェ商人の金融活動）の必要から、あるいは領邦の拡大する行政の道具の必要から、単なる証明証書より行為証書への転換はおのずと起るのであり、捺印行為は進展しつつあったこの転換——文書の有する意義における一定の発展傾向——を全体として完了させたにすぎなく、行為証書への発展にとって決定的な要素ではない。以上のホイベルガーの見解は今なお具体的実証を要するが、証書の発展を経済あるいは国家行政と関わらせて説明した点できわめて示唆的。（なおH・ブレスラウは、印章を捺すだけでは行為証書とはいえず、捺印証書が相手方に現実手渡されてはじめて、（けだし印章が捺された後でも証書が捺印者の手で破壊されえたらから。）当証書の発行による法取引の完了がみられた、と述べる。Bresslau, op. cit., S. 693. Anm. 2.

- (111) Redlich, op. cit., S. 162~3.
- (112) Patze, op. cit., S. 42.
- (113) Redlich, op. cit., S. 163, 166.
- (121) 一例（一三二一年三月一日グリース）君主はフィレンツェ出身市民にインスブルックとギョッセンとの関税所を賃貸。）*Nota anno, die et loco predictis idem dominus rex locavit Jacobo et Phylippo fratri suo de Rubeis de Floren(c)ia et eorum hereditibus thelonaea in Inspruk et in Bozano, qui expeditavit dominum regem de marcis CXXXII. libris III. grossis IV et Loblinum, civem de Ratispona, de Ver(onen)sium) murcis DC sub omni(bus) prioribus condicionibus sive pactis. A (anno) d (omini) MCCCXI. in kalend. marcii. (Zauner, S. 75, Nr. 34) 冒頭の *Nota anno, die et loco predictis* とは、直前に登録された同じく関税所賃貸の文書（註(121)の後者例）の日附場所を指す。*
- (122) Zauner, S. 60, Nr. 19（君主はインスブルックの税関吏に牧草地を授封。1309 Sept. 7）を例にとれば、省略は（イ）前文では文書発行者（君主）の名と称号（*Initulatio* u. *Inscriptio*）（ロ）主文では文書保護規定（*Sanctio*）と文書確認文言（*Corroboratio*、すなわち証明のため捺印をする旨の文言で、これが省略されるのは稀）（ハ）結文で、証人欄（*Subskriptionen*）であり、「君主がいついかなる内容の文書を発行したか」の本

来の行政上の必要と直接関係のある文書である。

(21) Heuberger, Kanzleivermerke, S. 439.

(22) 一例(裁判官の賃賃)² *Anno domini MCCL XXXXVI*

X. intrante Majo dimisit dominus dux Otto Jaekelino filio iudicis de Griez iudicium et officium in Serina a futuro sancti Urbani festo ad annum

pro maris XX et insuper conservabit castrum in expensis factis suis. (Gleichzeitiges Rechnungsbuch, I. C. 280 f. 88 f. Stolz, Vergabung, S. 379)

(23) 一例 (トランスバチ市民への公設賃賃の賃賃)³ *Anno domini MCCLXXXVII VIII exeunte Februarario in castro sancti Cemonis dimisit dominus Boehino*

de Florenzia et sociis suis casanas in Bozano ab epiphania domini transacta ad IIII annos pro CXX

maris anno quolibet et casanas in burgo Enne. (Ibid.)

(24) 一例 (貨幣鑄造所の賃賃)⁴ *Anno domini MCCCVI dominus locavit monetam in Merano Chuchilino et*

Achterio aurificibus a Kalendis Marci eiusdem anni ad tres annos integros pro maris CCXXX Vero-

eorum. (Gleichzeitiges Rechnungsbuch, I. C. 277 f.

1. Ibid. S. 380)

(25) 一例 (財務部長官職等の譲渡)⁵ *Anno d. CCCVII*

die XXVI Maii commissum est mihi [dem Schreiber des Raibuches] officium vicedominatus.

Anno eodem die XIII Junii dominus locavit iudicium in Maierberch domino Wernhero de Tablat pro

servicio consueto. (Ibid.)

(26) Heuberger, Urkundenwesen, S. 322 ff. トット

レキスターの作製は、公正証書記録簿ないしそこに収

録されている公正証書(公証人覚え書)を範とした。しか

しこれらの外部的影響以上に主動力となったのは領邦行政

の必要であり、すなわち文書部が君主証書の重要性を認識

し始めたこと、財務行政と文書部活動との徐々の分化が

重要。

(27) この訂正は例えば次の通り。(イ)草稿にはもともと

存在しなかった年月日あるいは証人の文言(すなわち草稿

結文)が、後に草稿の記録簿記入の際に草稿と同一あるいは別の手蹟で加筆される場合。例えば草稿では結文最後の箇所に、*Actum et datum Tyrolis in presencia……* との

のちあらわわつたのを記入の際に……の空欄に……に

あるいは取引の相手方の名の箇所(この箇所は草稿では空白となっていたり、また、単に例えば *Uxor sue et filie quondam Vir(ici)* となっていたりする)に具体的な名が書き込まれ、あるいは *et suis hereditibus utriusque* の言葉がもとの行の上に書き入れられる。(以上の事例は Zauner, op. cit. S. 64, Nr. 23; S. 65, Nr. 24) (ハ) 記録簿に記入された草稿テキストの最後に *Habel privilegium super eo* なる原本交付の旨の文言が付加される場合。この場合は原本作製後その現実の交付は、交付文言が記入された後になされた(Zauner, op. cit. S. 49, Nr. 4)。以上(イ)(ロ)(ハ)の訂正は文書部に残っている原本あるいは第二の草稿にもとづいた。

- (2) Heuberger, op. cit. S. 299.
- (3) Ibid. S. 312.
- (2) Redlich, op. cit. S. 162, Anm. 3. これは I. C. S. をなす。またシグムンド大公(一四三九—九〇)のものとでも草稿簿が作製された。
- (2) Ibid. S. 167.

(五) 以上、領邦文書部の活動と記録簿の成立とを概観した。記録簿作製の歴史的意義が多少とも知れば幸いである。以下では本節冒頭であげた(a)(b)(c)(d)の一例の試験をおこないたい。(a)では(イ)ラテン語文——ここには次節で述べるフィレンツェ商人の金融活動がよくあらわれ

ており、このためあえて紹介する次第である——と(ロ)ドイツ語文の二例をとりあげる。全五例のうち四例は記録簿ないし草稿簿収録のもの、一例は原本。なお参考までに原文を添えた)

(a) (イ)「予ハインリッヒはこの文書でもって次の通り告示する。予は、ボーツェン関税所税関吏フィレンツェ出身のヤコブ フォン ルーバインの兄弟たちで、フィレンツェ出身貴族ブルーヌス フォン ルーバインの息子たちでもある分別ある者フリッップ、ホルケールスおよびアルテシウス(の三兄弟)、彼らの伯父バンブス、そして彼らの相続人、且つここに姿をみせた彼らの商会員、に対し、メランの予所有の公設質屋をそれに付属するすべての権利とともに賃貸し譲渡した。(すなわち予は)彼らの先保有者であったフィレンツェ出身のマルクスと彼の商会員とがかつてそのもとにそれ(公設質屋)を維持した(と同じ)あらゆる法と慣習のもとに、彼ら(三兄弟ら)がそれを利用し管理すべく(賃貸し譲渡した)。(その際)かの公設質屋および貸付額および担保そして個々種々のあらゆるものに関して予よりかのマルクスに与えられた彼の特権状況のなかにみえるすべての箇条および取り極めが、彼ら(三兄弟ら)自身によつても有効に遵守するべきことを余は望む。上述 prestatort (金貸業者)たちは、その公設質屋より予に毎年ヴェローナ貨幣で七〇マルクを確かに支払うことを義務づけられる。この義務はフィレンツェのかのマルクスの最終会計

報告日から始まるものとする。(その際) 次の約定を「新たに」付け加える。すなわち、上述プレスタートルたちがやがて保有するに至るその公設質屋(の保有) 自体から予は決して彼ら「プレスタートルたち」を「次に述べる事態が到来するまでは」遠ざけたりはしないことを。「すなわち」予がかのフィレンツェのマールクスと彼の商会員とに對しかの公設質屋の件で拘束されており弁済を義務づけられたすべての債務、(さらに) 彼ら「マールクスと彼の商会員」による最終会計報告に際して彼らに与えられた予の令状にもつき彼ら「プレスタートルたち」が証明することのできるすべての債務、そして予の官廷書記官が「筆記し」携え、彼ら「プレスタートルたち」のおこなう収支決算の報告書のなかでやがて明らかとなるであろうすべての債務、から、(彼らプレスタートルたちが) 完全に解かれる(「すべての債務を弁済される」までは、予は彼ら「プレスタートルたち」を公設質屋自体(の保有) から遠ざけたりはしないと。そしてさらに、かのプレスタートルたちが既述公設質屋より予に支払うべきかの七〇マルクは彼らがこれを毎年余のためにかの債務の銷却に充当するであろう。(このことも予は新たに約定する。この「メラン公設質屋」の賃貸を不動のものとするため、予は予の捺す印章の保護によって「効力を」強められた当令状を彼ら「プレスタートルたち」に賦与した。以上がおこなわれ、文書が交付されたのは一三二四年一月一〇日グリースにおいて」⁽³⁴⁾

(a) (ロ) 「予ルードヴィッヒは以下の通り告示する。予は予の恩恵の続くかぎり、予の忠実なるハインリッヒ フォン エッシュエンロツホ伯「マインハルドの庶子」に對し、ウルテンの予の裁判区とそれに付属するものとをかつて予の別の裁判官が同裁判区において保有したごとくあらゆる權利、収益、榮譽、慣行を含め譲渡しこれを委ねた。ついで予は、貴族であるうと否にかかわらず裁判管轄を通じて同裁判区に所屬するすべての人民に對し差別なく次のごとく命ずる。彼らが予の名のもとに予に代わつて、彼「ハインリッヒ」に對し予に向かうがごとく、予の榮譽と利益とに関わるあらゆる事柄につき心底より従順にして且つ援助を惜しまぬことを。予はまた彼に對し、裁判管轄にもつき同裁判区に屬するすべての事項を自分に代わつてあたかも自分自身がおこなうがごとく職務にあたる權限をもつ別の裁判官を、必要時に彼が任命し(「う」る權利を賦与する。さらに予は、予自身、予の相続人および予の子孫の名において次の通り約束する。彼および彼の相続人が、正規の決算の結果まだ彼に對し予が負うすべてのもの(債務) を、予自身から、あるいは予が同裁判区を彼以後に譲渡する第三者から、清算され弁済される以前に、予は彼および彼の相続人を同裁判区より遠ざけたりしないことを。(以上について) 文書が交付されたのは一三四二年の祝福されたマルガレートの祭日後の「第一」火曜日(七月一六日) インスブルックにおいて」⁽³⁵⁾

(b) 「予高貴なるベーメン国王の次男ヨハンおよび予ヨハ

ンの妻で神の御恵みのケルンテン大公妃且つティロールとゲルツの伯妃マルガリートは、この文書でもって以下の通り告示する。予らは予らの側近顧問の助言にもつき次に述べることにつき一致するに至った。すなわち、予らは、予らの忠実なティロールのブルクグラーフ フォルクマール フォン ブルクシュタール、およびハインリッヒ フォン アンネンベルクを、予らが伯領ティロールのエツツュ溪谷とイン溪谷とにおいていたるところに所有する予らのすべての所領管理区〔関税所、貨幣鑄造所等を含む〕およびラント裁判区に対する〔予らのラント〕代官および命令官に任じ就けると。それゆえに、予らのすべての現在および将来の所領管理人〔税関吏、貨幣鑄造所管理官等を含む〕と裁判官とは、〔所領管理区と裁判区とからもたらされる〕予らのすべての収入を含めて彼ら〔兩名〕に勤務を尽すべきである。そして彼ら〔兩名〕は、予らがこの〔所領管理区、裁判区〕収入より受け取るものを、所領管理人および裁判官から收取し〔これでもって〕予らの〔ティロールの〕官廷属吏を給養し、属吏の職務経費につき配慮すべきである。また、予らの所領管理人および裁判官の何人も、彼ら〔兩名〕以外の何者にも〔所領管理区、裁判区の収入から〕何ものを与へべきでなく、もし彼らが彼ら〔兩名〕の同意なくして、予らの指図にもとつきあるいは他の何者かの指図に従い何ものかを彼ら〔兩名〕以外に与うときは、予らは、彼ら〔の当該債務負担行為〕に対しては、〔相手方のために〕清算をすることを義務づけらるべきでなく、それ〔彼らの債務負担行為〕は

無効となるべきである。そして〔予らは〕同じ所領管理人および裁判官に対し予らのほどこす恩顧にかけて強く次のごとく命ずる。彼らはあたかも自ら自身に對することく彼ら〔兩名〕に對し奉仕をなすべきである。彼ら〔兩名〕が同じ予らの所領管理人および裁判官から收取し受領するもの〔所領管理区、裁判区収入等〕については、彼ら〔兩名〕が予らに会計報告をおこなうべきであり、〔これによつて〕所領管理人および裁判官はその点〔収支の会計報告〕については予ら〔に對する義務〕より解放されるべきである。そして予らは以上に関して、当文書を証明のために予らの印章を添えて彼ら〔兩名〕に手渡す。以上が文書で交付されたのは、クリスト生誕後第一三三五年の聖パンクラーティウス祭日後〔第一〕火曜日〔五月一六日〕ティロール城塞において。⁽¹³⁶⁾

(C)「予オーストリア大公にしてティロール伯なるフリードリッヒは以下の通り告示する。予は、予の忠実で愛すべきハインリッヒ シュピース フォン シュピースに對し、シュタインアム リッテンの城塞とそこの裁判区とをそれらに付属するすべての収益および賃租を含め、賃貸借およびブレーゲの方式で譲渡し、彼がそれらを忠実に保有し守護すべきよう予〔自身〕の管理に代えて〔彼の管理に〕委せた。それゆえに彼は〔予より〕通告を受けたときはそれらを予に返還すべきであり、〔また〕それゆえに、彼もしくは彼の相続人はそれ〔裁判区収入〕から予もしくは予の後継者に對し、本年にはヴェーロー

ナ貨幣で一〇〇マルクと刑事事件の裁判からあがる収益とを手渡すべきである。さらに予が、文書でもってあるいは現場で即時に、彼もしくは彼の相続人に對し、彼らがそれ「城塞」を何らの遲滞、拒絶、異議をなすことなくどのような例外の対象を設けずまたいかなる敵意、奸計、危殆を加えることなく予に返還することを、求める場合を除き、彼もしくは彼の相続人はそれ「城塞」を荒廃させることなく保有し管理すべきである。また彼は、いかなる傭兵をも当傭兵が前もって「予に誠実の」誓約を果たすのでないかぎり、同じ城塞に宿泊させても「城塞守備の一員として」受け入れてもならない。彼あるいは彼の相続人が城館の外で捕えられ、あるいは死にまわられた——そんなことのないように——ときは、彼ら「傭兵」は「以後は」予および予の後継者、「予および予の後継者の」後は予の従兄弟と従兄弟の後継者、に對し、「直接」勤務をなすべきであり、また彼らは、予が彼らにそれ「城館」を要求するときは、遲滞なくそれを予に譲り誠実に危殆なく予の支配に引き渡すべきである。「以上おこなわれことは」この文書の証明でもって、一「四」二六年の四旬節中「復活祭から遡ること」第三日曜日直前の木曜日「三月七日」にインスブルックにおいて「予がこれを」公布する。以上につき私「書記官」の主君オーストリア「公」はシュピースより一通の對証を受け取る。⁽³⁷⁾

(d)「私クリスチャン リヒテンベルガーは私自身および私の相続人のために次の通り述べこれを文書でもって公けにす

る。啓明高貴の君主でオーストリア大公フリードリッヒ公——恩顧をかたじけなくする私の主君——は、カステルベルの城塞とそここの裁判区とをブレーゲ方式で私に譲渡しこれを委ねた。それゆえ私は、私のかの恩顧を受けしオーストリアの主君に對し、宣誓に代え私の誠実にかけて、かの城塞を裁判区をも含めて、第一に彼「主君」および彼の後継者「自身」による管理に代わり、ついで彼の従兄弟とその後継者「自身」の管理に代わり、忠実に保有し職務を司ることを誓い約束する。さらに彼ら「君主と彼の従兄弟、およびそれらの後継者」が、私と私の後継者と共に文書でもってであれ使者を通じてであれあるいは現場で直ちにであれ、それら「裁判区と城塞」を「返還」要求するときは、われわれはそれらをかれらに引き渡したくまた引き渡さねばならなく、いかなる形のどんな拒否、異議、遲滞をなすことなく、譲りたくまた譲らねばならない。そして以上おこなわれたことを証明する文書を私は、事柄の証拠となるよう貴き騎士ヘルマン ゲスラーが捺す印章を添えて、「君主に對し」交付する。「ヘルマン ゲスラーは」私が自分の印章を持たぬとき私の懇請に応じそれ「私の文書」に捺印をしてくれた。「この捺印のゆえに」ヘルマン ゲスラーと彼の相続人とに損害が生ずることは決してない。この「私の捺印」懇請「の際」の証人は、ティロール「城塞」のブルクグラーフで貴きハンス フォン ケニヒスベルク、および騎士ハインリッヒ フォン モルスベルクである。以上が「文書」に作製されたのは、一四二五年の聖マルガレートの日「八月一日」にイン溪谷の

(23)
[解註] < 22 49.5 10']

其

(22) *Nos Henricus etc. profitemur presencium in tenore, quod locavimus et dimisimus casanam nostram in Merano cum omnibus suis iuribus et pertinenitiis discretis viris Philippo, Porcello, Arthesio fratris Jacobi thelonearii in Bozano de Rubeis de Florencia, filiis nobilibus viri Baroni de Rubeis de Florencia et Banho patruo eorum et herediis ac sociis suis exhibitoribus presencium usitandam et exercendam in omni iure et consuetudine, quibus ipsam casanam quondam Marcus de Florencia, et eius socii predecessores eorum eam tenuerunt, volentes, ut omnes articuli et pacta in privilegio prefati Marci per nos sibi dato circa cazanam predictam et mutuum et pignora et alia omnia et singula per ipsos debeant efficaciter observari. De qua quidem cazana predicti prestatores nobis Veron(ensium) marcas LXX dare pro anno quolibet tenentur, incipiendo a die rationis finalis sepedicti Marci de Florentzia, tali interposito pacto, quod ipsam cazanam tenebunt predicti prestatores nec eos ab ea debebimus amovere ullo modo, quousque de omni debito in quo tenebamur et obligati fuimus*

antedicto Marco de Florenc(ia) et sociis suis ratione cazane predictae, prout litteris nostris super finali eorum ratione sibi datis poterunt demonstrare et in libris computationum suarum, quos habent notarii curie nostre, poterit inveniri, fuerint integraliter expediti; et nichilominus iidem prestatores illas LXX marcas, quas nobis daturi sunt de sepedicta cazana, annuatim nobis in eodem debito defalcabunt. In cuius locacionis firmitatem presentes litteras eis dedimus nostri pendentis sigilli munimine roboratas. Actum et datum in Griez a(mno) d(omini) MCCCXIIII. die X iuvrant. iam. indic. XII. (Zauner, S. 126, Nr. 98)

(22) *Wir Ludwig etc. verjehen, daz wir unserem getriwen Hainrich dem Grafen von Eschenloch unser gericht in Ullen und swaz dazuo gehert, als lang unser gnad ist, gelazzen und enpholhen haben mit allen den rehen, nuelzen, eren und gewonhaiten, als es ander unser rihter daselben emalen inne habent gehabl. und gepieten gemainlich allen lauten, sie edel sein oder unedel, die durch recht in daz selb gericht behoerent, daz si im in unserm namen und an unser stat an allen sachen*

die unser ere und nutz antreffent, gehorsam willich und feistenlich sein in aller der weis als uns selben. Wir geben im auch gewalt, einen andern rihier ze setzen an sein stat, swenne er des bedarf, der alle sache gewalt hab ze volführen, die daz gericht durch recht angehoerent, in aller der weis, als er selber. Und verhaizzen fuer uns, unser erben und nachkommen, in und seine erben von dem gericht nicht ze schaiden, sie werden eer alles des bericht und gewert von uns oder von dem, dem wir daz selb gericht nach im liezzzen oder enphuelhen, des wir im mit rechter raitung schuldich bleiben. Datum Insprucke a. d. MCCCLXII feria III post festum beate Margarete. (Gleichzeitiges Kanzleibuch W. C. 398f. 12; Stolz, Vergabung, S. 384)

(2) Wir Johannes iungster sun dez edeln chuniges von Pehaim und wir Margret, sein gemahel von Gots gnaden herzogin in Cherrnden, grein ze Tirol und ze Goertz, verjehen mit disem briewe, daz wir mit aller unsers rates rat uberrain worden sein, daz wir unser getriwe Volchmaren von Purnchstal purghrauen ze Tirol und Heinrichen von Annenberch gesetzet und gemachet haben ze phlegern und ze

gebiern über allen unseren ampt und gerichte, die wir haben bei der Elsch und in dem Intal liberal in der grafenschaft ze Tirol, also daz in alle unser amptlaute und rihier, die ielzo sint oder nachmalen chuenfrik werdent, mit allem unserm gette wartend sullen sein und sullen sie unser gesinde, daz wir haben von dem selben gette, daz si inuement von den amptlauten und rihtern, betrachten und besorgen mit der chost. Ez sol auch chain unser amptmann noch rihier niemem andern iht geben denne in und waer, daz si von unsers geschaefts wegen oder von iemand anders an ir paider willen, iht gaben, dez sullen wir in ungerunden sein ze rayten und sullen daz verloren haben. Und gebieten denselben amptlauten und rihtern vestlichich bei unsern hulden, daz si in also wartend sein als uns selben und swacz si von den selben unsern amptleuten und rihtern in genement und empfahent, da sullen si uns von rayten und sullen die amptlaute und rihler darum von uns ledik sein. Und geben in dar über disen brief ze urkund versigeltten mit unserm hangenden insigel. Der ist geben auf Tirol nach Christes geburte dreuzehen hundert jar und darnach in dem fuemf

本 und dreizigsten jare dez erltages nach sand
Pancracien tage. (Original-Pergament Landesre-
gierungsarchiv Innsbruck; Ibid. S. 383—4)

本

(三) Wir Fridreich, Herzog von Oesterreich, Graf
von Tirol etc., bekennen, daz wir unserm getrewen
lieben Hainreich Spiess vom Spiess unser vesten
zu dem Stain auf dem Ritten misampt dem
gerichte daselbs und allen nutzen und gulten, so
daru gehörend, in bestand und phlegweis ingegeben
und zu unsern handen empholhen haben, die getre-
wlich innehaben und zebehütten, also daz er uns
die wider wiss zeantwurten, also daz er oder sein
erben uns und unsern erben ditz jars davon überh-
aubt herausgeben oder raichen soll hundert march
perner und was maleficy treffend. Und sullen auch
die unnußlich innhaben und versorgen, wann wir
die mit briefen oder under augen an sy ervordern,
daz sy uns der wider abtreten an alles verziehen,
waigerung und widerred aller sachen nichts ausg-
enommen an alle aufsetz hinderlist und geuerd.
Er sol auch dhainen knecht auf derselben vesten
nicht halten noch aufnehmen, er swer dann vor.
Ob er oder sein erben ausserhalb des haus geuan-

gen oder mit tod abgeen wurden, da Got vor say,
daz sy uns und unsern erben, darnach unsern
vettern und erben, damit gewüßig sein und uns
das an verziehen, wenn wir das an sy ervordern,
auch abtreten und zu unsern handen antwurten
sullen auch getrewlich und ungvärllich. Mit irkünd
ditz briefs geben ze Inspruck an phincztag vor
letare in der vasten anno domini millesimo vicesimo
sexto. Darumb hat mein herr von Oesterreich ain
gegenbrief vom Spiess. (W. C. 415f. 48; Stolz. op-
cit., S. 389)

(四) Ich Christian Liechtenberger vergich und tun
kund offentlich mit dem briue für mich und mein
erben. Als der durchleuchtig hochgeborn fürst
herzog Fridreich, herzog ze Oesterreich etc., mein
gnediger herre, mir die vesten Kastelbell misampt
dem gericht daselbs in phlegswais ingegeben und
empholhen hat, also gelob und verspich ich dem
obgenannten meinem gnedigen herrn von Oesterreich
bey meinen trewen an aydstat die egenanten vesten
misampt dem gerichte zu seinen und seiner erben
voran und dann seiner vettern und irer erben handen
getrewlich innehaben und ze versorgen und, wenn

*sy die an mich oder mein erben ervordern, es sey
 mit brieven, boten oder under augen, daz wir in
 die wider antwurten und in der abtreden sullen und
 wellen an all waigrung aller sachen, widerred und
 vertziehen. Und des zu urkund geb ich den brief
 versigleten mit des edlen und vesten ritters Herm-
 ann Gessler anhangenden insigl ze zezeugnus der
 sachen und durch meiner bet willen daran gehengt
 hat im und seinen erben an schaden, wann ich
 eigens sigels nicht hab. Det bet sind getzeugen die
 edlen und vesten Hans von Kunigsperg, burgraf
 auf Tyrol, und her Hainrich von Morsperg ritter.
 Der gehen ist ze Hall im lntal an sund Marg-
 areten tag anno domini MCCCCXXV. (W. C. 415f.
 15: Ibid.)*